

〈教育ノート〉

## 養護教諭養成課程における 効果的な看護臨床実習カンファレンスの検討

毛利 春美\*, 鍵岡 正俊\*\*, 大西 宏昭\*\*  
久保 加代子\*, 石丸 真平\*\*\*, 古川 直子\*\*\*\*

A study on the effective training conference of  
nursing clinical practicum in Yogo teacher training course

Harumi Mouri, Masatoshi Kagioka, Hiroaki Onishi,  
Kayoko Kubo, Shimpei Ishimaru and Naoko Furukawa

**Key words** : 看護臨床実習 養護教諭 カンファレンス

### I はじめに

本学での看護臨床実習では、実習期間の10日間の中で、専任教員及び実習補助教員によるカンファレンスを2回実施している。2回のカンファレンスでは、臨地で実際の治療援助を通して、講義で学んだ知識・技術・態度を統合し、対人援助、健康教育に必要な技術を整理し、自己の課題を明確にすることを目的としている。しかし、カンファレンスを司会する教員は、専門教科外の教員がほとんどでありカンファレンスに対するイメージがつきにくく、実習の巡回指導時も、戸惑いがあるのが現状である。

看護教育における看護学実習のカンファレンスは、教授活動と位置づけられ、杉森らが「看護学実習カンファレンスは、看護教員が学習活動に対する日々の形成的評価の結果を根拠とし、教授方法と教授技術を検討、選択し、活用できるだけの知識と技術を必要する<sup>1)</sup>」と述べているように、カンファレンスの展開は看護教員でも運営が困難であると指摘されている<sup>2)</sup>。

医療現場ではカンファレンスは共通言語として、多職種間で用いられ、問題解決、治療方針など情報共有型、問題解決型として様々な活用される。看護教育の中では、領域別看護臨床実習の中にカンファレンスは重要不

可欠なものとして位置づけられ、実習における看護計画の立案・評価並びに学びの整理として活用される。このようにカンファレンスは、様々な医療現場で展開されており、看護学実習における教授活動として重要な役割をもつ。

また、実習におけるカンファレンスは学生の力量も問われる場面でもある。学生は、カンファレンスを通し、自信、コミュニケーション力、プレゼンテーション力、時間管理、場作り（環境調整）、リーダーシップ、論理的思考など、資質向上を図る絶好の機会でもある。

このような点から、カンファレンスを効果的に活用することで、学習成果と結びつけることが可能であると考えられる。そこで、今回、最終カンファレンス指導案を作成し、それによる学生の学びの整理と、司会運営した教員の反応から今後のカンファレンスおよび実習の展開について方向性を確認できたので報告する。

本文の中で展開しているカンファレンスは、対人関係の支援過程の中で、多職種で構成されたチームによって開催される会議のことと定義する。ここでいう多職種は、看護部長、看護副部長、看護師長、看護副師長、実習指導者、本学からは担当教員、学生で構成される集団のことをさす。

そして、カンファレンスの目的を、篠田が述べる、

受付日 2019. 5. 24 / 掲載決定日 2019. 9. 3

\* 関西女子短期大学 准教授

\*\* 関西女子短期大学 教授

\*\*\* 元関西女子短期大学 教授

\*\*\*\* 関西女子短期大学 非常勤講師

「メンバー間の意見交換により情報の共有化を図りつつ、多面的なアセスメントや意見交換による対象理解の深化と有益な支援方法を検討し、信頼関係を構築しながらチームを成長させることである<sup>3)</sup>」とする。

## II 看護臨床実習の概要

養護教諭養成課程における看護学は、免許状授与に必要な修得科目であり、本学では、必修科目単位、看護学 10 単位を、看護概論 (1 単位)、看護技術 I (2 単位)、II (2 単位)、救急処置 I (1 単位)、看護臨床実習：事前事後指導及び人権教育を含む (3 単位) をおこなっている。この中で、看護臨床実習は、1 年次秋学期に事前指導として、実習前オリエンテーションを実施し、事後指導では看護臨床実習終了後に実習報告会を実施している。実習前後で、講義形式の授業 (15 時間) と、1 年次秋学期終了後に春期休業中を利用した 2 週間 (10 日間) の病院への臨床実習を実施している。

### 1. 実習目的・目標

健康推進の実践者として、専門的知識、技術、態度・倫理を個別の対象へ応用・実践する能力を養い、養護教諭として望まれる専門職業人としての資質を培う。

### 2. 目標

- 1) 養護教諭に必要な知識、技術、態度を統合したうえで、人間の尊厳、生命への畏敬、死生観の理解にもとづいて、看護する心及び健康推進への理解を深める姿勢を養う。
- 2) 患者・保健医療チームの人々と信頼関係を築けるよう人間的ふれあいを深め、受容・共感・洞察力・感性等養うとともに、自らを客観視し、向上させていく態度を養う。
- 3) 医療機関において各専門職種 of 役割と機能を学び、健康回復・維持・向上・苦痛緩和のためのケアの実際を学び、養護教諭として健康教育に活用できる力を身につける。

### 3. 実習施設

大阪府内外の 10 病院にわかれて実習を行う。

### 4. 実習方法

実習病院の受け入れ状況により、1 病院あたり学生数 2 から 6 名で編成し、行動目標 (表 1) 実習内容 (表 2) にそって指導者のもと実習を行う。

表 1 行動目標

- |   |
|---|
| <ol style="list-style-type: none"> <li>(1) 病院の概要及び保健医療チームの構成と役割を理解する。</li> <li>(2) 患者・家族・保健医療チームの人々とコミュニケーションをはかる。</li> <li>(3) 看護内容・方法を学ぶとともに患者の入院生活を理解する。</li> <li>(4) 健康障害を抱えている対象及び家族の身体的・精神的・社会的課題を理解する。</li> <li>(5) 基本的なケアを指導・監督のもとに見学・参加する。</li> <li>(6) 学校と医療機関の連携について理解する。</li> <li>(7) 自己の課題を明確化する。</li> </ol> |
|---|

表 2 実習内容

- |   |
|---|
| <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 病院の概要、専門職種の構成、危機管理             <ol style="list-style-type: none"> <li>1) 事前オリエンテーション</li> </ol> </li> <li>2) 看護の倫理、患者の権利、インフォームドコンセント</li> <li>3) 病院の安全対策：事故・災害・震災等の対策</li> <li>4) 病院における感染防止対策             <ol style="list-style-type: none"> <li>2. 自己紹介 職員、患者の紹介と自己紹介</li> <li>3. 自己課題の明確化</li> <li>4. 看護の内容                     <ol style="list-style-type: none"> <li>1) 申し送り、チームカンファレンス</li> <li>2) 診療、ケアの見学・観察、健康教育への参加</li> <li>3) 看護技術への参加</li> </ol> </li> <li>5. 保健医療チームとの連携</li> <li>6. コミュニケーション・スキル</li> <li>7. 学生カンファレンス</li> </ol> </li></ol> |
|---|

### 5. 看護臨床実習報告会および看護観のレポート

実習終了後、看護観のレポート (約 1000 文字程度) を提出する。その後、実習病院ごとで実習の学びについて発表を行い、学びの共有を行う。

## III 研究方法

### 1. 研究目的

本研究では、カンファレンスにおける学びの現状を明らかにし、今後の看護臨床実習の内容や指導のあり方を考察し、カンファレンスでの指導のあり方を検討するための基礎的資料とすることを目的とする。

### 2. 対象

平成 30 年度看護臨床実習最終カンファレンスに参加した教員 6 名を対象とした。

### 3. データ収集方法と分析方法

事前に最終カンファレンス指導案を作成し、それに基づいて教員がカンファレンスを実施した。その後、教員によるカンファレンス実施記録をもとに、データを抽出した。実施記録は 9 病院分であった。

データは文脈の意味を崩さないように簡潔な 1 文にしてコード化した。コードは、相違性、共通性を検討し、類似した意味内容をもつものをグループ化しサブカテゴリーとして分類を行った。サブカテゴリーの内容の類似

性に沿ってカテゴリー化し名称をつけた。信頼性・妥当性を確保するために、分析は4名の研究者間の合意が得られるまで検討を行った。実施記録には、①学生の学びの内容 ②実習指導者の指導内容 ③教員の指導内容の以上3点についての内容をまとめたものである。

#### 4. 調査期間

平成31年3月3日から平成31年3月31日

#### 5. 倫理的な配慮

実施記録の本研究への利用については、対象者に口頭及び文書で説明し、同意を得た。分析段階で実施記録から個人や実習施設が特定されないように努め、研究結果を公表する際にも個人や実習施設が特定されることがな

いよう配慮した。実施記録は施錠できる場所にて保管した。

### IV 結果

#### 1. 最終カンファレンス指導案の作成と実際

本実習の最終カンファレンスでは、指導案を作成し、実施した(資料1)。最終カンファレンスの所要時間は、学生人数により異なり、学生人数2名の所要時間は約30分、学生人数6名の所要時間は約60分に設定した。指導者参加人数は、1名から8名であった。指導案をもとに展開した最終カンファレンスの実施記録は、9回分を対象に分析を行った。(回収率82%)

本研究において、カテゴリーは【 】、サブカテゴリーは《 》、コードは〈 〉で示す。

表3 学生の学び

【カテゴリー】	《サブカテゴリー》	〈コード〉
コミュニケーション	対象理解	対象に合わせたコミュニケーション
		一人ひとりに合わせた指導・ケア
		食事制限→患者さんの心・ストレスを踏まえて対応する
	相手を尊重する	相手のことを純粋に思うこと
		相手の立場に立ったコミュニケーション
		安心する言い回し、思いやり
		いつも患者にはなしかけるように変わらない意識のない人へのかかわり
	苦痛・不安の軽減	見通しを伝えることの大切さ
		子どもの不安軽減
信頼関係構築	患者と向き合う態度	非言語コミュニケーションの重要性。そばにいて安心すること。
		患者さんとの信頼関係構築の重要性(身なり、言葉)
		信頼してもらうには、コミュニケーション言語・非言語を活用し相手に話しやすいことを引き出す
		自分から積極的に行動する
	疑問を持ち積極的に質問をする。	
習慣の把握	普段の声かけ目配りをさりげなくしているコミュニケーション	
看護技術	観察の大切さ	習慣の把握重要→信頼関係に結び付く
	問診	自分の思い込みで相手を見ない。
	リハビリ	問診方法→普段の様子を知っておくことが重要
	清潔・不潔の概念	リハビリ→杖の使い方
危機管理・安全対策	ダブルチェック	清潔区域の理解
	異常の早期発見	薬剤管理場面ダブルチェック・トリプルチェック
	シミュレーション	自信がない時は周囲に確認する。
チーム医療	コーディネーター	普段を知っていることで、異常の早期発見に努めていた
	情報共有	ミスを防ぐ→シミュレーションとダブルチェックの重要性
	専門職	コーディネーターとして求められること→寄り添い、情報収集
養護実習にむけて自己の課題	コミュニケーション能力	チームカンファレンスでの情報共有
	指導力	専門職が力を発揮できる関係
	コーディネーター	子どもに安心感を与える。
	積極性	言語・非言語コミュニケーション力を学ぶ→自ら声をかけることの重要性
	生命への畏敬の念	一人ひとりの顔を見た指導
	健康推進者としての役割	安心感を与え信頼関係を結ぶ。保健室だけでなく学校の一員あることを意識する。
	養護教諭と看護師の違い	人の後ろに隠れるようなところがあつたが、今後は積極的にやっていく。
	交通事故の患者の援助から健康推進者としての役割意識	
	出産生命の誕生・奇跡	
	養護教諭と看護師の相違の再認識と養護教諭になることへの決意。	

2. 最終カンファレンスでの学生の学びの発表内容 (表 3 参照)

最終カンファレンスでの学生の発表時間は 3 分程度であることを事前に伝えている。内容は前日に整理し、具体的事象から学んだ内容を明記し、そして今後にどのように活かして生きたいかを発表させている。

カテゴリーは【コミュニケーション】【信頼関係構築】【看護技術】【危機管理・安全対策】【チーム医療】【養護実習にむけての自己の課題】の 6 つに分けられた。

【コミュニケーション】は 3 つのサブカテゴリー《対象理解》《相手を尊重する》《苦痛・不安の軽減》と、10 のコードで構成されている。

【信頼関係】は 2 つのサブカテゴリー《患者と向き合う態度》《習慣の把握》と 6 つのコードで構成されている。

【看護技術】は 4 つのサブカテゴリー《観察》《問診》

《リハビリテーション》《清潔・不潔の概念》と 4 つのコードで構成されている。

【危機管理・安全対策】は 3 つのサブカテゴリー《ダブルチェック》《異常の早期発見》《シミュレーション》と、3 つのコードで構成されている。

【チーム医療】は、3 つのサブカテゴリー《コーディネーター》《情報共有》《専門職》と 3 つのコードで構成されている。

【養護実習に向けての自己の課題】は 6 つのサブカテゴリー《コミュニケーション力》《指導力》《コーディネーター》《積極性》《健康推進者としての役割》《養護教諭と看護師の違い》と 8 つのコードで構成されている。

3. 指導者による最終カンファレンス指導内容 (表 4)

74 のコードが抽出され、【コミュニケーション】【信頼関係構築】【観察・情報収集】【救急処置】【保健指導】

表 4 指導者指導内容

【カテゴリー】	《サブカテゴリー》	〈コード〉
コミュニケーション	対象理解	相手が話しやすくなるための工夫。例えば、相手のことを知り、会話内容を覚えておくこと等。
	良好なコミュニケーション技術	入院中（一人で過ごす時間が長い）ならではのコミュニケーションの必要性。
		状態が変化する人々とかかわる現場で、普段通りに関わること。 言葉の使い方に対して、気をつけないと人を馬鹿にしたような言い方になってしまう。
	感情の言語化	感情を言葉に表現することは大切である。
	伝達内容の選別	人に伝える言葉 何が大切で、何を伝えないといけないのか、整理する。 「私は観ています」ということを伝えることが大切。
	話を聴く技術	患者の話を聞くことは、しんどいことであり、スキルが必要で、学んでほしい。 傾聴、共感。
	非言語コミュニケーションの活用	会話できない人には非言語で対応することの感性が必要。 話せない人、伝えられない人の気持ちは読み取る、感じ取ることができるように。
発達段階に応じたコミュニケーション	発達段階に応じたコミュニケーション。 さまざまな年齢層の人とコミュニケーションできることが大切。	
信頼関係構築	普段の関係性	毎日の積み重ねにより、信頼関係づくりになる。
	ケア	信頼関係があるから患者さんも身をゆだねてくれている。
	コミュニケーション能力	信頼関係構築のためのコミュニケーション。
	情報活用	日常のケアの中で得られる情報を上手に活用することで信頼関係を構築することができる。
	快の刺激と安心感	「快」を患者に与えることが必要。それによって信頼感が生まれ、患者がリラックスするとともに、患者の恐怖を取り除くことになる。
観察・情報収集	対象の観察	人を見る実習。ナースの行動を観察して 後半は患者患者の観察ができた。
		その人のこと、観察ができていたか？
		相手の良さがずっと出てきたか？
		一面だけを見ることなく、全体を見ることが大切である。それには、訓練が必要である。 空気を読むという幻想を捨て、五感をフル回転して相手の心を押し量ることが大切。
	気づきからの対応	この格好では寒い、これは痛そう等、人として当然の気づきと対応ができる必要性。
	かかわりの中での情報収集	外来では観察が限定される。短いかかわりの中での情報収集。
	対象への関心	相手に興味を持つこと。そして情報は自分から集めに行く。
	状況を把握する	情報をどのように捉え対応するか。
	患者の背景	支援をするときは、患者の背景をしっかり把握することが大切。
情報の共有	共有した情報、知識はケアにいかすこと。	

救急処置	緊急時の対応	対処方法を知っておくことは重要である。 救急患者、養護教諭の仕事につながっていると思う。
	対処方法	対処方法を保健指導に活かしてほしい
保健指導	長所をみる	長所を基盤に、その人の成長を促すことが重要。
	指導方法	短所は3回見守って、それでも改まらないときのみ指導すればよい。
危機管理	アレルギー	アレルギー対応
	感染対策	感染・インフルエンザ
	情報発信	感染予防の第一人者として、いつ何を発信するのか。その情報はどこからどう収集してくるのか、考えて動くこと。
	原理原則を守る	医療は進化しても基本は変わらない。
	言葉と記録	「言葉」、「記録」の重要性を肝に銘じてほしい。
チーム医療	協力	協力体制の重要性。
	人間関係	人間関係の調整。
	患者中心	「患者」さん中心にチーム全体が動いている。
	心構え	人により「当たり前」は異なる。その上でのチーム。
	フォロー	看護師はドクターをフォローし、家族や患者に声をかけることが大切な仕事の一つである。
	家族へのケア	患者さんの背後には「ご家族」がいることを忘れないでほしい。
	親の希望	親の希望すべてを受入れることはできない。
専門職としての必要な資質・態度	誠実さ	初心忘るべからず。慣れても雑にはならないこと。雑になっていく自分にいかに気づくか。
		嘘はつかないこと。
		人を相手にする仕事であるから、まいいかはない。
		「人が好き」であってほしい。「謙虚さ」を持ち続けて下さい。
	心構え	患者のかかわり礼儀正しくてよかった
		学生気分・考えの甘さは態度に出る。
		ありがたうと言ってもらいやすい役割があるというだけ、ありがたうと言ってもらうための仕事ではない。
	感性を磨く	積極性が必要である。
		芸術鑑賞などで感性を磨くことも必要。
	代弁者として	感性を磨く。
		話せない人、伝えられない人の気持ちは読み取る、感じ取ることができるように。
	ロールモデルとして	看護師は常に患者のそばにいるため、代弁者になることがある。患者のために、何を誰に伝えるのか？
		患者の代弁者として役割がある。
	自己研鑽	人は自分を見ていると意識すること。
		知識技術学び続ける。
		経験の積みかねが大切。
	人としてのあり方	一人でできることとできないことの判断。
		大半の時間は、看護師・養護教諭として以前に人としてどうあるべきかについて考えてほしい。
	長所をみる	看護師一人ひとりの良いところを取り入れて、糧としてほしい。
ポジティブ思考	必ず、壁にぶつかる。ぶつかったとき、常に前向き、プラス思考で対処することが大切。決して後ろ向きにならないこと。	
根性	根性を持ち、いろんなことを乗り越えていくこと。	
相談する力	助けてくれる人、頼って良い人を見定めること。	
周辺領域への関心	今回、歯科の見学もしてもらったが、学校現場では、歯科にかかわる指導もしっかりしてほしい。	
自己管理能力	感情のコントロールができる	感情のコントロールができる人に。
	自分をコントロールする	自分で自分をコントロールすること。
	体調管理	自己の体調管理は重要である。
	ストレス対処の獲得	自分自身のストレス管理などに務め、まず、自分が健康であることが重要。
	事前準備	目標を事前に立てて臨む。事前準備は必要である。
	全員出席	脱落者が無く実習が完了できてよかった。

表 5 教員指導内容

【カテゴリー】	《サブカテゴリー》	〈コード〉
コミュニケーション	意図的	会話は全て意図的になされるものであること。 「がんばれ」という言葉を安易に使用しないようにしたいのであれば、代わりにどのような言葉を選ぶのか?等、一般論ではなく、その先にあるかかわりの具体を考えようとする姿勢を持つこと。
	安心感	患者に治療の見通しを持たすことが大切だという発表があったが、子どもと対応する場合は、まず、安心感を持たせることが大切であり、その言葉かけや態度等、養護実習で学んでほしい。
信頼関係構築	信頼関係の構築の必要性	患者やその家族との信頼関係の構築は、学校現場でも重要であり、養護実習においての課題の一つにしてほしい。
	普段の関係性	発達障がいのある人の診察の観察で、日ごろの人間関係の重要性を感じたという発表があったが、養護実習では、信頼できる人間関係を構築するための具体的な言動を、どのようにすればよいのか、考え実践してほしい。
看護技術	知識	問診には知識が必要という発表があったが、知識は必要不可欠の能力。
	経験	学びを生かせるよう経験を積むことが大切である。
	症状アセスメントの知識	腹痛を訴えてきた児童に、幅広い視野で原因を考える必要があるという発表があった。養護教諭としてはとても重要なことで、子どもの家庭環境や成育歴、友だち関係、教師との関係等、考えを巡らせてほしい。
	成育歴・家庭環境の把握	
	友人関係	
	教師との関係	
医療的ケア	養護教諭であっても、研修を受けることで医療的ケアができるものもある。	
危機管理	ダブルチェック	ミスがないように、二重、三重のチェックがなされているという発表があったが、学校現場では、十分でないところがある。難しいことではあるが、見習ってほしい。
チーム医療	情報共有	情報共有が大切であるという発表があったが、学校現場においても共通する。担任、管理職、栄養士、給食調理員等との連携を積極的に学んでほしい。
	対処能力	コミュニケーション、危機管理、不安軽減のためのかかわり等は、ノウハウとして個々に存在するのではなく、すべてがつながり『対応』として存在していること。
	連携	
専門職としての資質	感性	相手を前に、自分の感性が相手の何を見てどう感じるのか?
	情報収集能力	アンテナを広げ、どこにどのような情報があるのかを気づける人である必要がある。
	知識・技術・態度	これら、人としての存在の上に、知識と技術が加わることで、専門職として成立するということ。
	羞恥心への配慮	羞恥心に配慮した対応を心がける。

【危機管理】【チーム医療】【専門職としての必要な資質・態度】【自己管理能力】の9つのカテゴリーに分けられた。

4. 教員による最終カンファレンスでの指導内容 (表 5)

16のコードが抽出され、【コミュニケーション】【信頼関係構築】【看護技術】【危機管理】【チーム医療】【専門職としての資質】の6つのカテゴリーに分けられた。

V 考 察

今回、教員は、最終カンファレンスを指導案にそって展開し、学生の学びを明らかにした。また、カンファレンス時同席した指導者と教員指導内容を確認した。学生の学びは、6つのカテゴリー【コミュニケーション】【信頼関係】【看護技術】【危機管理・安全対策】【チーム医療】【養護実習にむけての自己の課題】にそって語られ、それらは、21のサブカテゴリーと35のコードで構成された。この内容は、実習目標である「1. 養護教諭に必要な知識、技術、態度を統合したうえで、人間の尊厳、生命への畏敬、死生観の理解にもとづいて、看護す

る心及び健康推進への理解を深める姿勢を養う。」「2. 患者・保健医療チームの人々と信頼関係を築けるよう人間的ふれあいを深め、受容・共感・洞察力・感性等養うとともに、自らを客観視し、向上させていく態度を養う。」「医療機関において各専門職種との役割と機能を学び、健康回復・維持・向上・苦痛緩和のためのケアの実践を学び、養護教諭として健康教育に活用できる力を身につける。」「4. 自己の課題を明確にする」の4つの目標で使われているキーワードである[養護教諭に必要な知識・技術・態度][生命の畏敬][健康推進への理解][看護する心][患者・保健医療チーム][信頼関係][受容・共感・洞察力・感性][各専門職種の役割と機能][健康回復・維持・向上・苦痛緩和のためのケアの実践][養護教諭として健康教育に活用できる力][自己の課題]と合致している。しかし、学生の学び内容からは、実習目標2の「自らを客観視し、向上させていく態度」に該当するカテゴリーである【養護実習に向けての自己の課題】に「向上させていく態度」は学生の学び内容に表記はない。しかし、教員、指導者の指導内容のカテゴリーから該当する内容を抽出すると【専門職としての必

要な資質・態度】のサブカテゴリー、《自己研鑽》が該当すると考えた。

以上から、最終カンファレンスによって、学習者である学生が現段階でどの程度自己の実習目標を達成できたかを発表することで、指導者や教員によって客観的に把握でき、2週間の実習での学びは今までの知識と統合されることが明らかになった。カンファレンスは形成的評価を行う場として効果的であるといえる。

最終カンファレンスは、学生の受動的な学びではなく、主体的および能動的な学びの教授活動であることが明確になり、学生の資質能力を高める上で、非常に効果的であったといえる。また、学生の発表内容は具体的場面に基づいた学びが多く、自分が感じたこと、大切だと認識したことを中心に語られていた。その経験を保健室の運営に活かしていきたいとの意欲も示されており、各自の学びはよく整理されていた。

また、それぞれが、実習での体験から学校指導現場での応用にとどまることなく、なぜそれが自分の心に響いたのか、自分はこれを大切と感じる価値観を持っている等、自己と向き合う形でこの実習経験をまとめていた。これは、臨地実習指導者の指導方針によるところが大きいと考える。杉森らは「看護学実習において学生が、患者や医療スタッフなど、講義や演習という授業では出会わない他者との関係を通して、特異な心理状況に置かれる可能性がある。学生の多くは青年期であり、青年期の発達課題を持ち、この課題を達成するために青年期にある人々の関心は、自分自身に向けられる<sup>4)</sup>。」というように、青年期の発達課題は、自己同一性の形成であり「自分とは何か」と向き合いながら、今一度、自己を見つめなおし、対人援助職としての職業選択をしていく際の人との向き合い方に対する価値観の再構成がされていると考える。それは、指導者の指導内容【対人援助職としての必要な資質・態度】(表4参照)の内容からも明らかである。このカテゴリーは、《誠実さ》《心構え》《感性を磨く》《代弁者として》《ロールモデルとして》《自己研鑽》《人としてのありかた》《長所をみる》《ポジティブ思考》《根性》《相談する力》《周辺領域への関心》といった12のサブカテゴリーに分けられた。これらの内容からも、指導者それぞれの対象に対しての向き合い方に対するねがいが多く含まれていることがわかる。指導者の看護観が大きく反映される内容ではあるが、それらに学生はふれることで、自己の看護観にも影響を与え、価値観の変化や強化が行われたと考える。

本実習は、臨床の場で看護に関する知識・技術・態度について学ぶことが目的であるが、教員以外の指導者から直接的な指導を受けるといって社会を学ぶ場でもある。

指導者の指導内容カテゴリー【自己管理能力】で、《感情のコントロールができる》《自分をコントロールする》《体調管理》《ストレス対処の獲得》《事前準備》《全員出席》と6つのサブカテゴリーで語られたように、「社会」で働くうえで、必要な各学生の課題が浮き彫りになったように感じる。知識技術の不足を補うことや、卒業後のリカレント教育を考えると、この2年間では職業人の育成と同時に、人として当然の気づきと対応ができる社会人に育てる必要があるように感じた。本実習は、その重要な機会になると考える。

学生が、今回の学びを養護実習における学校現場で何をどのように活用していくかのイメージが大変弱いと感じた。イメージが不十分であることへの自覚がない中で、学校での活用目標は、思い込みと誤解の強化につながりかねない。実際の場面をしっかりとイメージした上で、自分の動きを考えることが必要である。学生は、学校現場を知らない状態で本実習に臨むため、実習での学びからイメージや具体例などを自分で思い出すことが困難であるということである。表5 教員の指導内容の〈コード〉に書かれている内容の多くが、学校現場を結びつけるもしくはイメージができるような具体的内容が多く見られた。どの教員もカンファレンスで語られた具体的現象から、学校場面を想起できる内容に転化し関連付け、学びを意識的に伝えていることがわかった。これらの教授活動は、杉森らが述べているカンファレンスでの教員行動の「教授技術複合活用による看護現象解説と原理への統合<sup>5)</sup>」といえる。看護臨床実習と養護実習をつなげるために、1年時の授業で、さらに多くの学校での具体事例を語り聞かせていく必要があると感じた。

看護学実習カンファレンスにおいて教授活動を展開する教員の行動として6つの概念が言われている。①教授技術複合活用による看護現象解説と原理への統合 ②目標達成状況査定による教授方略の維持と転換 ③目標達成度向上のための学生個別体験の共有化 ④問題発生回避による学習過程円滑化 ⑤実習過程掌握による学生感情への共感 ⑥疲労・緊張への配慮による学習停滞の黙秘と打破 の以上6つの概念が存在する<sup>5)</sup>。

今回のカンファレンスでの教員による実施記録から、最終カンファレンスにおいては、「教授技術複合活用による看護現象解説と原理への統合」「目標達成状況査定による教授方略の維持と転換」「目標達成度向上のための学生個別体験の共有化」を中心に、指導者、教員とも語られていることが明らかになった。これら、役割をとおして、集団の凝集性、成果を達成させるためには、カンファレンスには外的刺激としての、専門知識に基づいたオブザーバーが必要であることが示されたといえる。

## VI 結 論

カンファレンスを授業の一つと位置付け、指導案を作成し、教員による運営を展開したことで、ある一定の成果が示された。最終カンファレンスを教員、指導者共に協働し実施することで、学生の学びと自己の課題が明確になり、次の養護実習への動機づけになることが分かった。また、専門職業人として社会で必要な態度が、実習指導を通して自己を振り返る機会となっていることも明らかになった。

## VII おわりに

今回は、平成 30 年度看護臨床実習の、最終カンファレンスの指導案を作成した。今回の指導記録を整理する中で、病院の指導者の皆様が、学生に対し、実習での体験を、各自の性格傾向や感性にまで深めて指導して下さっていたことがわかった。そのため、学生も自己と向き合うことができているのだと理解できた。そのような指導を頂き実践を見学させることで、自らが主体的に考えることができているように思う。指導者の皆様に感謝したい。

学生の課題として、発表内容のまとめ具合や発表のスムーズさに差がみられた。学生個々の学業の向き合い方、成績等も考慮した学内での事前指導が必要である。しかし、体験内容、体験からの学びに関しては、どの学生も十分に自分のものにしており、命の最前線での実習成果は十分であったと感じる。

今回の研究は、教員側からの一方的な評価であるため、相互性を担保するために、今後学生と病院指導者の実習内容、評価等の調査検討を行う必要がある。

実習でしか学べないことがある。引き続き学生の達成感を高められるような実習計画、実習調整を行っていき、実習指導者と連携を強めていきたい。今後効果的な看護臨床実習を展開するにあたり、学生が自身を客観的にとらえられることができるようなかわり方や指導方法を構築していきたい。

## 謝辞

本調査にご協力いただきました学生の皆様に感謝いたします。また、実習病院の指導者の皆様には日々の指導及び本研究カンファレンスに協力していただき厚くお礼を申し上げます。

本研究は平成 30 年度研究奨励費の助成を受け実施いたしました。

## 引用文献

- 1) 杉森みどり、舟島なをみ「看護学実習展開論」『看護教育学 第 4 版』医学書院、2004 年、P 280
- 2) 和泉明子、大沢たか子、矢野智恵 他「臨地実習におけるカンファレンスの実態－教員のカンファレンス実施記録の分析を通して－」『高知学園短期大学紀要第 43 号』2013 年、47-57 頁
- 3) 篠田道子『チームの連携力を高めるカンファレンスの進め方』日本看護協会出版会、2010 年、P 3
- 4) 杉森みどり、舟島なをみ「看護学実習展開論」『看護教育学 第 4 版』医学書院、2004 年、P 274
- 5) 杉森みどり 舟島なをみ「看護学実習展開論」『看護教育学 第 4 版』医学書院、2004 年、P 278

## 参考文献

- ・和泉明子、大沢たか子、矢野智恵 他「臨地実習におけるカンファレンスの実態－教員のカンファレンス実施記録の分析を通して－」『高知学園短期大学紀要第 43 号』2013 年、47-57 頁
- ・篠田道子「カンファレンスの基礎知識」『チームの連携力を高めるカンファレンスの進め方』日本看護協会出版会、2010 年、2-25 頁
- ・篠田道子「多職種連携を高める チームマネジメントの知識とスキル」医学書院、2011 年、42-51 頁
- ・杉森みどり 舟島なをみ「看護学実習展開論」『看護教育学 第 4 版』医学書院、2004 年、245-294 頁
- ・中西純子、岡田ルリ子、塩月ぬい子 他「学生にとって意味のあるカンファレンスとその関連要因」『愛知県立医療技術大学紀要 第 2 巻 第 1 号』2005 年、21-27 頁
- ・安酸史子「評価」『経験型実習教育』医学書院、2015 年、76-86 頁